

大谷先生追悼文

高木祥示

大谷俊介先生が召天されて早や 2 年が経過いたしました。亡くなられた 2013 年度には東邦大学理学部の客員教授を御願ひし、講義の際には、NICE の方々をお呼びし一献傾けることができると考えておりましたが、叶わぬ願ひとなつてしまいました。改めてご冥福をお祈りし、私にとって、懐かしく充実した日々であった名古屋大学プラズマ研究所時代の思い出の一端を記し追悼の文とさせていただきます。

当時、私は同志社大学の博士課程の学生として、藤田順治先生率いる計測グループ(当時の学生を含むスタッフ:門田清、野田信明、佐藤国憲、西沢章光、川澄義明、土田一輝、森田繁、高木祥示:忘れていた人がいたら御免なさい。)に所属していました。真空スパークを利用した多価イオン源を作り、電荷移行反応の実験をしていました。短時間に発生するイオンを検出するため MCP を電流計測方式で使用していましたが、出力電流がイオンの価数によりどのように異なるかが問題でした。その様な折、NICE グループでは Cryo-NICE が稼動を始めておりました。NICE では多価イオンを MCP によりカウンティング計測していましたが、多価イオンを検出する際、出力パルスのパルスハイト分布を取ってもらえれば解決することになります。藤田先生が話を進めてくださり、徐々に大谷先生との関わりが深くなっていきました。

NICE グループの人たちとは以前に日曜日などにも時々計測グループの実験室でお見かけしたことがあり、よく働く人たちだと思っていた。私もほぼ毎日プラ研に通っていましたが、どこか親近感を感じていました。当然ですが、当時は大谷先生を含め NICE の人たちは若く、これまで大谷先生と書いていましたが、大谷先生と呼んだことは無く、兄貴分のように思い、いつも大谷さんと呼んでいました。大谷さんは客員部門に所属し、ACE、NICE と表面の 3 つのグループを統

括しておられました。研究・実験に関わることをするのは当然ですが、入れ替わり立ち代り来られる方々と毎晩夕食を一緒にとられるだけでは無く、5 時ごろ酒屋にお酒を注文することもたびたびありました。「おもてなし」の心を会得されているかのように、人を本当に大切にされ、人と飲み食べ語らうことを楽しまれていることが伝わってきました。グループでよい仕事をするためのお酒の効用とか活かし方を生来身につけておられるようでした。私は自宅から通学していたのですが、交通の便が悪く車で通っており、よくご自宅までほろ酔い加減の大谷さんを送っていましたが、得がたい時を過ごせたと思っています。大谷さんの朝は早く、私が 9 時にプラ研に行くと、前日にどれだけ飲んでいても NICE メモなどの書き物を仕上げてもらわれました。すごい人だと感心していました。

私の就職に関係するのですが、原子過程とは少々異なる表面グループについて少し触れておきます。大谷さんは学習院大学当時に村田先生のところで学位を取得した表面の専門家でもあります。大谷さんから Hugstrum の固体とイオンの相互作用についての文献を見せてもらい大変興味を感じたことを覚えています。表面グループは最初学習院に関わりを持つ人の集まりだったと思います。川口洋一、田澤雄二、小谷正博、重田諭吉、後藤哲二、大谷俊介の方々が集まっておられ、ベリリウムに水素イオンを照射し、電子捕獲後の水素からの光を観察されていたと思います。大谷さんがある時、「哲のところでは人を公募しているから出してみたら。人は決まっているみたいけど。」と言われました。哲さんとは後藤哲二さんです。東邦大学理学部に物理学科が発足して間もないころで、富永五郎先生と表面物理学教室を立上げておられました。応募書類を提出してどれくらい経ったか忘れましたが、表面グループの実験があるから参加して、その後宴席が用意してあるから出るようにといわれました。富永

先生もいらっしやるとの事でした。大谷さんがケアしてくれたのは間違いなのですが、その後、私は東邦大学理学部物理学科の助手となり富永・後藤両先生とともに表面・真空の分野で仕事をする事になります。

大谷さんには研究のこと、就職のことと大変お世話になりました。それだけで有難い事なのですが、一緒に実験・議論・お話をするうちに、大変大事なことを教わった気がします。東邦大学に赴任した当時、いつしか、学生と飲みながら夕飯を一緒にとり実験をしておりました。今ではとてもできませんが。今にして思えば当時も色々大変な事もあったと思うのですが、人前では噁にも出さずいつしか解決しお酒をおいしそうに飲んでいる。そんな姿が浮かんできます。なかなか大谷さんの真似はできませんけれど、本当に魅力ある人でした。東邦大学の客員教授の年齢は70歳までとなっていますので、大谷さんをお呼びできる最後の機会だったのですが、本当に残念に思います。若い人に大谷さんの話を聞かせたい思いがありましたので、こんなことになるのであれば、前回お願いした時の講義をそっと録音しておけばよかったと悔やんでおります。

大谷さんのすばらしい功績にはまったく触れていない追悼文となってしまいました。大谷さんのはにかむ様な笑顔が忘れられません。ご冥福をお祈り致します。